

刊行にあたって

本増刊号が発刊される2020年秋は、年初からの世界中での新型コロナウイルスの感染拡大の懸念から閉塞感が続き、STAY Healthy が世界中の合言葉になっている。世界的には多くの国でロックダウンが続いているため、経済活動は縮小し、医療機関の受診も抑制されている。また、各学会の学術大会も従来の集会方式では行えず、オンラインによるWeb開催が一般化してきた。このような状況がいつまで続くのか、ワクチンの普及か集団免疫獲得か、いずれにしても早期の収束が望まれる。

このような状況下で本増刊号が企画され、執筆者の先生方には感染症対策で混乱する多忙のなか、編集者の要求する無理難題のテーマにしっかり応えていただいた。

本増刊号の旧版に相当する2014年に刊行された『歯科の痛みを見極める 診断・治療50のQA』は、歯科臨床で遭遇する多くの痛みの疑問に適確なヒントを与えることを目的として編集された。内容は歯科横断的に広い範囲に及び、かつ、多くの臨床的疑問への答えとして、あえてまだ確定していない経験的なヒントも記載されている。その先進的な内容は多くの読者に歓迎され、好評を得た。2019年には韓国語にも翻訳・出版され、韓国においても極めて先進的な「痛みの本」として評判になっている。

本増刊号は旧版の目的を引き継ぎ、臨床に役立つ内容の充実を目指して企画された。第1章は歯科臨床に診断を根づかせ、治療の第一歩を確実に踏み出せることを目的に編集した。臨床において診ることの多い痛みの主訴に対して、先生方の臨床経験をもととしたパターン認識（イメージ）による診断に加え、仮説演繹法に基づいた臨床診断推論を展開している。考え得る鑑別診断を、可能性の高いものから見逃してはならない疾患まで挙げ、それぞれを検査・予備診断しながら、最終診断に至る過程を示している。これは臨床の多くの場面で活用できると思っている。

第2、3、4章は旧版を引き継ぎ、臨床の場で読者のみなさんが感じるであろう多くの疑問に答えている。臨床に密接した疑問のためにエビデンスベースの回答ができないものもあり、あえてナラティブな経験に基づく内容も収載してある。ナラティブでありながら、その内容は6年前の旧版と比較すると信頼度は非常に高まっている。たとえるならば、旧版が認定医レベルとすると、本増刊号の内容は専門医レベルに高まっているといえよう。現在のわが国における痛み診療のレベルが高まっていることが実感できる。

第5章は、痛みを扱う際にぜひとも知っておきたい痛みの神経生理の最新知識と精神科医による口腔顔面痛の精神・心理的捉え方について詳述している。患者さんのさまざまな痛みの把握のよりどころになると思う。

いずれの章も最新の知識が網羅されていて、読者の先生方の“痛み”の臨床に役立つことと思う。そして今後、わが国の痛み治療の道標になることの期待も込めて、あえて本増刊号のタイトルを『臨床現場で役に立つ“痛み”の教科書』とした。

臨床の現場でぜひ活用いただき、ご意見・ご感想をお寄せいただければ幸いである。

2020年9月
編集委員一同